

---

# **わたしとボクのぬくもりの距離。**

霜月美由梨

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

わたしとボクのぬくもりの距離。

### 【Zマーク】

Z8566Y

### 【作者名】

霜月美由梨

### 【あらすじ】

機織の職の端女である少女が売られ、そして買われた家の物語。

## ●（前書き）

平日は18：00～20：00、  
休日は10：00を毎回に更新していきたいと思っています。

わたしには、名前がない。

物心ついたときにはちゃんと名前があつて、それを呼んでくれるお父さん、お母さんがいたけれど、それもわたしの幼いときに殺されてしまった。

それ以来、わたしは、端女として朝な夕な機を織る仕事についていた。そんなある日だった。

「おい」

わたしを呼ぶときはいつもこんな言葉だつた。振り向くといきなり腕をつかまれ、引きずられて小屋の外に連れ出された。なにかしてしまつただろうか。

そう思いながら周りをみると、きらびやかな衣を着た、いかにも身分の高そうな男達が私たちを囲つていた。

「こんなので良いのですか？」

わたしを使つていた男は下心のある目で男達を下から見上げて首をかしげる。

わたしだけ、置いてきぼりだ。

「ああ。この女だ。こい」

そういうつて男の一人はわたしの腕をとつて強く引っ張つた。

いつものことだ。

わたしは要らなくなつたのだ。

荷物を入れるだけの粗末な馬車に入れられてわたしはそう膝を抱えた。

がたがたと荷馬車は進んでいく。

今度の働く場所はどこだろうか。

男達の身なりからして、遊郭ではないことは確かだ。甘い香のにおいもしなければ、怪しい雰囲気もなかつた。

こうならば、武官のような、高潔で近寄りがたい雰囲気があつた。

「おい」

また、わたしを呼ぶ声。

気がつけば馬車は止まっていて扉を開けられていた。

ボロ布をまとつただけのわたしは、ふらふらと馬車から降りて、目の前に広がつた大きな屋敷に息を呑んでいた。

「あ……」

「ひむら」と

綺麗な衣をまとつた女の人がわたしを誘導する。首をかしげながらその人についていく。

わたしはどこかの家に買われたのだ。

「長旅」苦労様」

そんなことをいつてくれる女人を不思議に思いながら、わたしはあいまいに微笑んだ。

わたしは言葉をしゃべれない。声を失つてしまつているのだ。

「声が出ないの？」

「くくりとうなずく。かすれた、さつきみたいな声は出るのだが、言葉はまるきりでなくなつてしまつている。それはおそらく幼少時の体験のせいだろう。

「いつていることはわかるのよね？」

優しい、いうならばお母さんみたいな聲音で女人人は、わたしのお姉ちゃんぐらいの年の人はいつた。

わたしはまたうなずく。まともにご飯を食べられていない足には、この屋敷のやわらかい土はきつい。

「大丈夫？」

うなずく。足をとられそうだが、何とか歩けている。だが、すぐに足をとられてしまった。

「おつと」

すぐ上から優しげな男の声が聞こえた。そしてふわりとわたしを包み込むぬくもり。

こけたわたしを受け止めてくれたのだ。

「ああ。蓮様」

「この子は？」

「私どもの新しい……」

「この子、あいつにくれないかな？」

「あいつとは、まさか、紅様に？」

驚いた声を上げた女人人にわたしは首をかしげ、そして、優しい香の香りのする衣をつかんで自分で立った。

「ああ、ごめんね。……ああ。だめか？」

「だめつて、私どもはそれでも良いですが、でも……」

「この子ならあいつも気に入るよ」

そういうつてわたしの頬をそおつと撫でた男の人は、声に似合つ優しい面立ちに笑みを浮かべた。

「はじめまして。私はこの屋敷の主の蓮だ。キミは、今日から我家で働くんだよ」

わたしは声を出せないなりに辺りを見回して女人人に助けを求めた。

「……この子？」

「声が出せないです。……なにか聞きたいことがあるの？」

うなずく。紙と筆があれば何とか通じるはず。

そう思つてわたしはしゃがみこんで地面に文字を書いた。

「君、字をかけるんだね。なになに？ なにをしたらいいかつて？ それを聞いて、いわれたことをこなすのが君の仕事だ。それに、こここの屋敷にある部屋を一つ貸そう。ぜひ、君には私の弟の世話をしてもらいたい」

弟？

そう書くと男の人、蓮さまはうなずいてわたしの頭をそつと撫でた。

お父さんにされていたみたいで、とっても優しい気持ちになれた。「ああ。ちょっと氣難しいやつだけれども、根はすつごく優しいやつだ。うるさい侍女は嫌だといったから、君の声が出ないのは

あいつにとつては良いのかも」

そういうぐすりと笑った蓮さまにわたしはあいまいに微笑んで立ち上がって一礼した。

「ようしく

わたしの意志をしつかり理解してくれていたらしい蓮さまにわたしはやっと心からの笑みを浮かべられた。

●、（後書き）

ほとんどの設定など練りあひ上、その場の勢いで書きました。なんか違ひ、どこか違つところは御容赦ください。

そして蓮さまの案内で屋敷をざつとみた。

温かくて、それでいて、雨風のちゃんとしのげる家だった。

「そして、ここが君に頼みたい人の部屋だ。紅、入るぞ」

そういうて蓮さまは扉を開けて自分が入ると、扉を押されてわたしが入るのを待つていてくれた。

「なんですか？ 兄上」

部屋の奥から男の人の声が聞こえる。

髪をまとめたまま、昼寝でもしていたのか。まとめきれずに顔を覆っている鳥羽のような髪に寝癖のつけたその人は出てきた。

鋭く整った顔立ちに険をにじませて蓮さまをみて、わたしを見る。

「……この子は？」

「今日からおまえの世話をしてもらひますだ。えつと、名前は？」

わたしは首を振つてきょとんとした。

侍女に名前などあるのだろうか。逆に聞きたい気分だった。

「……もしかして名前が？」

蓮さまの呆然とした声にわたしは「くくりとつなづくと、蓮さまの弟君でいらっしゃる、わたしと同じか、すこし上の年の男の人を見上げた。

「……焰」  
「え？」

男の人は、そういうてわたしの髪に手を伸ばした。わたしの髪はどここの血を引いているのか、夕日色だった。

「おまえの名は、今日から焰だ」

吸い込まれるよつな黒い瞳にわたしは我知らずに目を奪われていた、そして、こくりとうなずいていた。

「声が出ないと？」

わたしはもう一度うなずく。

男の人はすこし困ったように眉を寄せて、蓮さまを呆れたような目でみた。

「もしかして、ボクが前の侍女がつるさいといつたからですか？」  
「いや、それもあるが、今日帰ってきたらちょうど同じ子が来ていてね。年も近いから友達にも良いと思つて」

「余計なおせっかいを」

「親切な親心さ」

きらんと玉が鳴る音がしそうなほど鮮やかに微笑んだ蓮さまに、男の人は深くため息をついて、わたしの肩に手を回して中に案内した。

「ということで、私はもう行くからな」

「はい。ご苦労様でした」

温かくて大きな手に肩をつかまれてわたしは無意識に男の人に寄り添つていた。

「…………」  
「お……」

ゆびの？ と唇を動かす。

そうすると男の人は目を瞬かせて額に手を当てた。言葉を選んでいるようだ。

「体を清めるのに、川に行くだろ？」

こくりとうなづく。わたしは川で泳ぐのが大好きだ。

「そこまで行くのはここでは面倒だから、水を引いてあるんだ。その水をすこし温めて、ためてあるのだが……そこですこし行水をしてきなさい」

噛み砕いた言葉でそういうてくれる彼の言葉に、わたしはこくんとうなずいて、案内されたお湯殿なる場所に入つて、初めての温水を堪能した。

「心地よかつたか？」

邪魔にならないように定期的に切つている髪を綿の布で包んで、今まで来ていた衣よりもずっと柔らかで温かい衣に身を包んだわた

しは、彼の側によつてうなずいていた。

「そうか。ならばよかつた。……ボクの名は紅、といつ。覚えていてくれ」

そういうてはにかんだ彼にわたしはうなずいて一礼した。  
「そんなにかしこまらなくて良い。……これからは楽にしていく  
れ。すこし聞きたいことがあるのだが、いいか?」

首をかしげてみせると、紅さまはすこしいにくわうしながら  
口を開いた。

「声は、まったくでないのか?」

その言葉にわたしは首をかしげて肩をすくめた。

正直、どこまで出るのかはわからなかつた。

今までそんなものが必要な職業ではなかつたから。

「ボクの名をいつて『じらん』

「……オノ……あ……あ」

やつぱり出ない。音の残滓の音が出るだけで、まったく言葉では  
なかつた。

のびに手を当てて目を伏せたわたしに、彼は目を細めて小さく笑  
つた。

「大丈夫。これから出るようになる。完全に音が出てないようなら  
ばそろはいえないが、ちゃんと音は出てるから」

ゆつくり出せるように練習しなこと優しくいつた彼に、わたし  
は「こくんとうなづいていた。

これが、ご主人様の紅さまとのはじめての日のことだった。

「焰

「……あー」

一応口を動かしてそういう。言葉ではないがそれでも声を聞いてもらいたくてわたしはいつ。

紅さまとわたしは不思議なほど会つた。

割れた石の破片がぴたりとはまつてもとの石を形付くるような不思議な感覚。

「これを兄上のところに届けてくる。君はここで待つてくれ」うなずいて紅さまが出て行くのを見送る。ここに連れてこられてもう数ヶ月が経つ。夏の一雨が待ち遠しい日差しが和らぎ厳しい冬の気配をおわす秋がすぐそこまで来ていた。

こここの屋敷の人たちはみんな優しかった。

侍女以下の仕事をしてきたわたしに、根気よく仕事を教えてくれ、また、普通に話しかけてくれる。

それは、侍女などの下働きだけではなく、紅さまをはじめ蓮さまや、蓮さまの奥方様もそういう方だった。

なんとなく、わたしの家を思い出した。

わたしの家も、記憶が確かなら、ここまで大きくないものの侍女はいて、家事を手伝ってくれて、わたしの相手もしてくれていた。

「焰さん」

振り向ぐとすこし気位の高い侍女の人気がいた。正直、わたしはこの人が苦手だ。

「ああいうのは私たちが行くの。わたしがやりますといつて、手の書状をとつて蓮さまのところに行くのよ?」

すこしきつめの口調につなづいて謝るよつと頭を下げる。

「本当に、声でないの?」

バカにするようなその声。

わたしには慣れたその聲音。わたしは頭を上げてうなずく。

「こんなに立派なのがあるのに、何故出ないのかしらね？」

「あー！」

わたしはなにが起きたのかわからずのどをつかまれていた。途端にこみ上げてくる嘔吐感。わたしは顔をゆがめて手をばたつかせていた。

「あ、……あい、でー。」

あかん!」かにゃ!にゃ! でしょ!「な声でわたしは抵抗す  
る。

「でも、のど元や、首を触られるのは嫌いだった。それは、父母を殺されたときにわたし自身ものどをつかまれ殺されそうになつたからだね。」

「はい、相手のどうやない？」

わが本気で嫌がっているのをみて小變ゆきそこは第三微女

わたしがばたばたと手をさせているのにもかまわずに、彼女はのどをつかむ指に力をこめて、本当にのどを握ってきた。

「ああああ！」

瞬間膨れ上がる恐怖。

いた。

「危ないじゃない？」

彼女はそういうて、息が詰まらない程度に握つてくる。その時だ

「なこをしてーる！」

なはをしてしまふ」

鋭い声に、彼女はハツとした顔をしてぱつと離れた。わたしは、ただ狂乱の中にいてわからなかつた。

「ああああー！」

暴れるわたしをみて紅さまは驚いた顔をしていたのだと思つ。

そして、わたしののど元についた赤い手跡に、紅さまは、あわて

ことかその侍女の頬を打つた。

「貴様はなにをしている!」

怒鳴る紅さまに侍女は屈辱に顔を赤くさせ、声を震わせて申し訳ございません。からかいがすぎました。と白々しくいってみせる。

それでも、紅さまの気は治まらない。

「もうどこへと行くがよい。私はもう貴様の顔などみたくはない」

そういうと侍女を部屋から追い払い、泣き叫び壁にもたれてがたがたと体を震わせるわたしにそつと近づいてきた。

「大丈夫だ。焰」

「いや、いや」

その時は確かに言葉をしゃべれた。頭を両手で抱えて首を振つていた。

紅さまは、わたしに田線を合わせるように床に膝をついてわたしの顔を、涙と鼻水でひどいことになつてゐる顔を覗き込んだ。

「焰」

優しい声音。わたしはぽろぽろと涙を流しながら紅さまの優しいお顔を見る。

お兄様である蓮さまよつはするじく整つて、すこし近づくことをためらわれるような顔立ちは、時にびっくりするぐらに優しい表情をされる。

「もう、大丈夫だ」

そういうつてわたしに両手を差し伸べてそつと抱きこんでくれる。

近くにあるはずのぬくもりが遠くにあるような気がした。

わたしは彼の腕の中に長い時間いたんだと思つ。

そして、気がついたときには、紅さまが使われているふかふかの寝台の上で寝ていた。

「焰、いるか?」

蓮さまのすこし焦つた声。わたしは慌てて体を起こして、着衣の

乱れがないかを確認したあと、寝室から出た。

「ここにいたか。紅は、そこにいるか？」

わたしは首を横に振った。

いつの間にか日が暮れていて、真っ暗な闇の中、大粒の雨が降り出していた。

「くそ、あいつどこに家出した？」

めずらしく悪態をつく彼に首をかしげて机の上に書き置きがあることに気づいて目を通した。

「焰？」

「……わる、かつた？ イエン、の、ふぼ、ころした、の、は、…  
…わが、ちち？」

声が出ることにも驚いたが、その内容にも驚いた。

「……父上が君の父母にも手をかけていたのか？」

「ちち、うえ」

まだ、かすれる声で首をかしげると、蓮さんは嫌な予感がするといつて、詳しい話は紅が戻つたらするといって部屋を出て行ってしまった。

わたしも嫌な予感がした。

その予感にしたがつて、屋敷の外に出ていく。  
服を汚してはもつたいたいからと、元のボロ布を身にまとつて外  
に出る。

この時間帯、だれも外に出ないのだろう。わたしは、部屋から一  
本失敬してきたひもで髪をくくつて、走り出した。  
どこにあると云つわけではなく、ただ予感の知らせた場所へ、  
走る。

屋敷の格子窓からみていて思ったのだ。

ここはふるさとなのではないのかと。

あの川の流れや、あの里山。この屋敷の近くにある町になんて見  
覚えがありすぎて驚いた。

そして、町に連れて行ってくれた紅さまが、その町の人になんて見  
れているということにも、驚いた。

町の人曰く、紅さまは先代さまにとつても似ているそうで、それ  
が怖いといつていた。

どこの流れ者かわからぬわたしに名前をくれて、なおかつ町に  
出て行かせて遊ばせて、欲しいものを買い与えてくれるような優し  
い方がそう恐れられていることがわたしは口惜しかった。

そう、紙に書くと、彼は、珍しく頬を染めてそっぽを向いた。  
「そんなこというんじゃない。……はずかしい」

そういう彼にわたしはにつこりと笑っていた。

ぴたりと雨戸の閉められた家の隙間を走る。

泥が足だけでなく、太ももや全身にかかる。それでもわたしは走  
るのをやめなかつた。

「さま、……」

ポツリと呟く声が意外としつかりしたものだつた。ドクンと嫌な

予感が胸を締め付ける。

「紅さま！」

そう叫んだ声が、普通に出た。

わたしは驚きながら辺りを見回す。町を通り抜けて里山の裾野まで来ていた。

足がもつれて転ぶ。体を打つ雨が大粒で、冷たくて痛かつた。

「紅、さま」

わたしは立ち上がり、もつれる足でまた走り始めた。

秋の色が香りはじめたその裾野をすぎて、真新しい塚や朽ちた石がぽつんと置かれているだけの墓場にやってきた。

なぜ、ここにきてしまったのかはわからない。だが。

すこし離れたところに見えた人影に、わたしは驚いていた。

すこし朽ちた土盛りの正面にひざまずいてうなだれる人が一人。

その人の衣は色鮮やかな涙色。

「紅さま！」

叫んで、駆け寄る。

その土盛りがだれのものであるかはどうでもよかつた。部屋着の单ではこの雨は冷たすぎる。

そう思つて隣に座り込む。不思議なにおいがした。

すこし、生臭いような、金物臭いような。紅さまの傍らには綺麗に磨かれている一つの短剣がある。そして、うずくまつたからだが隠しているのは。

「……紅、さま」

右肩を左手で押さえてピクリとも動かない、彼にわたしはまた声をかすれさせていた。

「いや……

「う

かすかにその背中が震える。わたしは夢中でその背中に手を当てた。

「紅さま」

呼びかけると、雨に打たれて、傷の痛みに顔を白くさせた紅さまでこじらをみるとよつに首をめぐらせて声を詰まらせ、そして、田を細めた。

「ああ、焰……」

吐息だけのその声にわたしは首を振っていた。

「いや、嫌です、紅さま！」

声が出る度に手を当てながらわたしはそれだけだった。

震える度に手を当てながらわたしはそれだけをいつていた。

「…………もう少し、わけ、ない。…………ごめん」

ちいれな、ゆっくりな弦とと共に、彼の体から力が抜けていく。

「ダメ！」

そうゆすつても、彼は痛そうに眉を寄せながらも、それでも申し訳なさそうに、していた。

「いやああああああああああ！」

そして、彼のまぶたが完全に閉じた瞬間、わたしは叫んでいた。

それは幸いだつたのだろう。

その金切り声に、不審に思つた町の墓守の老人が見に来て、私たちを発見してお屋敷に伝えてくれたのだった。

お屋敷からの使いの人たちが、私たちを屋敷まで連れて帰り、紅さまは居室の寝台上で、薬師の治療を受けていた。

わたしはというと、放心状態が続いて、促されてようやく、お湯殿で体を清めて、元の侍女の服を着込んだ。

「よく、見つけてくれましたね」

泣きはらしたわたしの顔に蓮さまはいたわるようになつた。  
わたしはうつむいてぶんぶんと頭を振つていた。

「父が、ここによつてきてバカ息子を成敗してくれたといったときはわたしも、焦りましてね。あの父はどこかがいかれている人ですから、剣で聞かなければならないと思って、気だけが競つて気がついたら口が利けないほど痛めつけてしまつていきましたよ」

蓮さまは苦笑氣味にそつといつて、机に用意された急須にお湯を入れてお茶を二つ入れた。

本当はわたしの仕事なのに、なんで体は動かないの。

「どうぞ。すこし温かいものでも飲んで体の力を抜いてください。あれは大丈夫です」

紅さまの傷はひどいものだった。

右から左は斜めに切られ、あとすこし入つていれば、死は免れなかつただろう。

そして、とつさに後ろに飛び退つて刃の入りを浅くしたのだろうと、ざつと状態をみた薬師の人人がいつていた。

「でも……」

「大丈夫。私たちの一族のものは皆傷の治りが早いのです」

それに、そこらの虫並みの生命力もありますからと朗らかに笑つ

てみせた蓮さまにわたしはなにも返せずに、ただ、入れてもらったお茶を両手に持つて、静かにすすつた。

「……そうだ。先ほど、いったことですが」

わたしは顔を上げてそれに応じる。おそらく、置き手紙のことだわい。

「私どもの父、先ほどもいったように頭がおかしくて、虫の居所が悪いだけで村や町に下つて人を切り殺していた」

「……」

なにもいわずにわたしは蓮さまを見上げる。蓮さまはそつと田を伏せて眉を寄せた。

「私の母も、そのせいです。紅の母親は、紅の田の前で殺されてかすれた声に、なつてしまつた。蓮さまはさびしげに笑つてそつと田を閉じた。

「自分の中にも、あの男の血が入つているなんて信じたくないんです。紅は特に。でも、その姿は父の生き写しで……」

そう呟いた、蓮さまは涙を流しているように見えた。

だけれども蓮さまは泣いているわけもなく、ただ小さく笑つてみて目を開いてわたしを優しく見つめた。

「おそらくあなたもそここの町の出身なのでしょう。町人が、ユイに似ているといつていきましたから」

「ユイ」

「おそらくあなたの本当の名前。字はわかりませんが」

「……わたしにはもう、紅さまがつけてくださつた名前があります」

「ええ。それでも、名は父母からの贈り物。大切に胸の中にしまつておいてください」

優しく笑つた蓮さまにわたしはこくりとうなずいてぬるくなつたお茶を見下ろした。

「蓮」

落ち着いた、薬師の声。

はつと顔を上げると、難しい会話を蓮さまと薬師がして、そして、その会話が一段楽したところで蓮さまがわたしにうなずきかけてくれた。

「今は意識がなく、傷が膿んでいて大変な状態らしいですが、とりあえず大丈夫みたいです。さ、いっておやりなさい」

温かいその言葉にわたしはうんとうなずいてお茶を置いて、蓮さまの居室を抜けてすこし離れたところにある紅さまの居室に入つて寝室に足を踏み入れた。

「う

かすかなうめき声が聞こえる。

そろそろと移動して寝台の側に座ると、包帯に覆われた肩がすこしだけ布団から出ていた。

「紅さま」

と呟いても答えるべき人は深い闇のそこにたゆたっている。

布団を首元までかけてやると紅さまはかすかに目を開いてぼんやりと天井を見上げた。

「紅、さま？」

小さく呼びかけると、紅さまは左手を出して、痛みに顔をゆがめながらこちらに差し出してきた。

「どうしました？ お水でも？」

その言葉に紅さまは小さく首を振りながら辛そうに目を細めた。ぎゅっと体の奥が締め付けられるような感覚。

震える大きな指先をそつと包み込みながら、わたしはしっかりと握っていた。

「紅、さま？」

紅さまは指先の感触にすこしだけ、眉によつていたしわを解いたよつだつた。

雨に打たれて、そして傷が膿んで熱が出ているのだろう。

荒い呼吸の中にも安堵の吐息をほうと漏らしてそのまますとんと

寝台に体を預けて眠つてしまつていた。

「春さん」

背中から優しい声が降つてきた。

わたしを最初に案内してくれた侍女の先輩、春さんだ。

「今日から紅様の身の回りのお世話をしなさい」

うんとうなずいて、わたしは春さんを見上げる。

「大丈夫。あなたがしていた仕事は私が引き受けけるから。あと、あのバカ娘やつたみたいね。一人減つてしまつたけれども暇している侍女が多いのよ?」

あなたと違つてねと笑う春さんにわたしはすこしだけ笑つてこくりとうなずいて、お願いしますと頭を下げた。

春さんは笑いながらうなずいて、ふと、紅さまの左手、わたしが握つている手に目を向けた。

「それは紅様が?」

驚いた様子の春さんにわたしはうなずいて、笑つた。

「そう。ならばおさら側にいて差し上げなさい」

深い声の春さんはなぜか泣きそうに眉を下げてそういうて、あと忙しいからと外に出て行つてしまつた。

「紅さま」

高い熱にかすれた声を上げてうめき、眠つている紅さまの手をきゅと握り締める。

まだ、この冷たい手には力がない。

だけれども、絶対回復してわたしの手を握つてくだれる。

わたしはそう思つて、片手を彼の手に残して、もう片手で汗に凝つた額をそつと、ぬらした手ぬぐいで拭いていく。

何故、運命といつもののは容赦がないのだろうか。  
ボクは時々、そんなことを考える。

雨に打たれ、二つ盛られた墓を見下ろしながら、雨に打たれる。  
彼らは父に殺された。

そして、ボクと一個しか変わらない女の子は殺されたのか生きて  
いるのか。

あの赤髪の子は彼らが殺された日以来、みていない。

「おまえか」

しゃがれた、男の声。ボクは、もつとも憎むべき人間を背後に迎  
えていた。

「父上」

「感傷に浸っている間があるのであれば、勉学に励め。兄のようこそ、  
そして、私のように地位を高め、都まで上がって来い」

「この町はどうするのです？」この領地は「

「都の暮らしにはたらぬもの。他のやつらにくれてやれ」  
兄が都に行くことは当の昔に決まっていたことだった。ボクがい  
ずれこの町を治めるのだと勤めて歩き回るよつにしていた。もし、  
本当にそうなつたとき、困らないように。

「おまえは一番私に似ている。期待しているぞ」

下の言葉は知らないが、上の言葉ならばこの男以外にもたくさん  
の人があつてきた。

この男は、似てゐるからかわいがるという思考の持ち主ではなく、  
ただ、使える駒ができたのだと喜ぶだけだった。そして、それを母  
が諫め、かんしゃくを起こした父が母を殺したのだった。

幼いころの記憶だが、やけにはつきりと残つてゐる。

いつもならばがんばります、とか、また、御冗談を、というが、

今日のボクは違かつた。

「ボクは、都には行きません」

はつきりとした言葉に、背後の気配が変わる。ボクは振り返つて、

鬼と対峙する。

「なに?」

ボクの老けた顔が赤く染まつていぐ。まだ、ボクは怒りにこの顔を染めたことはない。

「ボクはここを治めて骨をここに埋める覚悟をしています」

なぜ、こんなことを口走ったのだろうか。

兄の口を通してだつたらこの人はこんな顔をしなかつただろう。

「ふざけたことを。この私のいつことが聞けないか?」

「ボクはあなたの使える駒ではありません」

『この子はあなたの使える駒ではありません』

母がいった言葉をそつくりそのまま再現してみせる。

ボクだって覚えているんだ。そして、この男のこの後の行動も。

「ならば、おまえは消えろ」

そういうわれるのはわかつっていた。

「感情のままに、自分より下のものを切り殺し、少女の運命を狂わせたあなたの言いなりなんてなりやしない」

男は、父はボクに刃を抜いてのど元に突きつけた。ボクもそれとなくよけて自分の持つていた、邪魔にならない程度の長さの剣をとる。

「この父に刃を向けるか

「妻を切り殺し、子供に刃を向ける父にいわれたくありません」

所詮は似たもの同士なんだよ。バカ親父。

そう心中で付け足すと、それが聞こえたように父の顔が真っ赤に染まつて、一瞬で剣が消える。

僕はとつたに後ろに飛び退るが、墓があることを思い出して体をひねる。

鼻先を刃がかすめ、胸辺りの衣が裂ける。

そして、ボクは体勢を崩した父の隙を狙つて飛び出していた。

その時だつた。父の開いた左手がもぞりと動く。

嫌な予感がした。

剣を投げつけるように手放して後ろに飛び退るが、父は右腕に刺さつたボクの剣を振り払うように腕を振り回しながら左手で逆袈裟に僕を切りつけていた。

腹から肩にかけて熱いものが肉を断つ。

「この雨だ。だれも通らないだろう。その発言、後悔して死ぬが良い」

結局この人は決定的な致命傷を与えずに、人を殺す。

中途半端なんだよやることが。

水音を立て、去る人を感じながらボクは、屋敷によるであらうあの男が、剣に仕込まれた毒に苦しみあえぐ姿を想像して、かすかに笑みを浮かべた。

斜めに切られた傷がズキリと痛む。

ボクは飛ばされた剣を拾つてから、衣が汚れることもいとわず、さつきまで立つて見つめていた墓の前に座り込んだ。

あだ討ちなんて、思わない。ただ、ボクもあの男と同じで、自分の感情に任せて剣を振るつただけだ。

焰の両親を殺したのが、父だと、信じられなかつた。だが、焰のあの髪の色は見覚えがありすぎた。

十数年前に、ボクと仲良くしてくれていた一個下の女の子。

ユイと呼んでいたあの子は、両親が殺された翌日から姿をみせなくなつた。

ボクもそのころには母を殺されて、殺されるということがまだ理解できなかつたが、幼いなりに殺される、死ぬということはもう見えなくなることなのだ、と感じていた。

「ごめんな……」

そして、彼女と再会した。

美しく成長をしていた彼女は、ボクのことは覚えていないようだつた。それに、彼女は声を失っているようだつた。

あまり心に負担がかかりずさると声を失つたと薬師がいついた。

あの幸せだった町長夫婦が田の前で切り殺されたのだ。

許されざることだ。

ボクとほぼ同じ顔が彼女の両親を殺したのだ。彼女がボクを憎むのは時の問題だった。だから、と。

「『めんな……』

痛みに視界が煙る。雨だけない視界のぶれは田の前の土盛りを大きくする。

音を立てて崩れ落ちたボクは、左手で右肩を押さえてうめき声を噛み殺した。

雨の音が耳をつんざくようだった。

痛みで意識を失いたいのに、それを引きとめるように雨が耳障りだった。雨の音は好きだったはずなのに。

「……さまっ！」

愛らしい、小鳥がさえずるような声が聞こえた。その声は悲痛を帯びて、また、必死さを感じられた。

だれの声だろうか。

首をめぐらしたくても、体がいつもと利かなかつた。体の冷え方からして、だいぶ、時が経つていいようだった。

「紅さま！」

近くで、聞こえた。

体を動かしたい。

この声の主を確かめたい。

ぬかるんだ大地に膝をついたような激しい水音。髪に泥が跳ねるが、雨がすぐに洗い流す。

「紅、さま……」

ボクはやつと頭を動かして、頬を地面に擦り付けるようにしながら、声の主をみて、体の力が抜けたのを感じた。

「ああ、焰……」

意識して漏れたため息じゃなかつた。

ただ、本当に、最期かもしれないと思つたから、安心したのだ。  
だれかが傍にいてくれることに。

彼女は首を振つてなにかをいつ。

それも、もうボクの耳は聞き取つてはくれなかつた。  
まあ、いいか。

最期に一目みられたんだから。

僕はそう思いながら、あっけなく意識を失つてしまつていった。

右肩からかけての傷の痛みがつかの間和らいだことを、不思議に  
思いながら。

それからは夢うつつだった。

激痛にさいなまれたかと思つたら、温かい指先がボクの手を包み込んでくれたり、髪を撫ぜられたり、頬を撫でられたり。

声は聞こえなかつたが、うつすらと覚えているのは紅い髪だつた。そして、ふと、目を開いた。

天井の暗さに不思議に思いながら、ボクは体を起こす。さらりといつもは束ねている、母に似た黒い髪が背中に揺れてくすぐつた。

右肩から左の腹までに引き連れた痛みを感じたが、動けないほどではない。

ボクは布団をはいで、寝台の隣においてあつた履物に足を突っ込んで、ふらふらする体を叱咤しながら寝室を出た。

「紅さま？」

湯殿を使つていたらしい焰が素つ頓狂な声を上げる。髪を拭いたままの格好できょとんとボクのことをみて、そして、頭が理解したらしい。彼女はボクに駆け寄ってきた。

だが、ボクまであと数歩といつところで彼女の体が傾いだ。

「焰！」

ボクが慌てて駆け寄つて受け止めるが、急な動きに耐え切れなかつた傷が痛みを発する。

息を詰まらせて痛みをこらえたボクは、ボクに寄りかかつたままでいる焰を見下ろした。

「焰」

「ごめ、んなさい。ちょっとふらつとしただけで」

そういうて立とうとするが、体に力が入つていない。ひとまず彼女を床に座らせてみるが、一人で座れないようで、ボクに体を預けてくる。

触れ合う部分がとても熱かつた。

湯殿から上がつたばかりだからだらうか。

「焰」

くたりとボクに体を預けて焰は目を閉じて浅く息をついてゐる。けがをしているボクには荷が重い。

「だれぞ」

よく通る声でそう呼ぶと、がたがたとあわただしい足音が聞こえてきて、ぞろぞろと人がなだれてきた。

兄と、薬師と春と、その他侍女達だった。

「おま、いつの間に起きた」

「いきなりお起きになられるとは相当回復したようだ」

「小言はあとで聞く。この子を」

「お?」

兄はボクの胸に寄りかかっている焰をみてうれしそうな顔をした。

「だれか、赤飯」

「だれがやるか」

薬師がすかさず近場にあつた内履きで頭を殴る。見慣れたやり取りにボクはふつと息を吐いて焰を見おろした。

そして、薬師は、ボクの顔色を確認してから焰の顔をみて苦笑をした。

「栄養失調に、疲労。ちょっとした風邪で熱が出ていくようです」

「ボクの寝台に」

「あなたはまだ寝ていなければ……。それに貧血もとれていない。だれか、その部屋の寝台を用意してくれるかな」

なだれてきた侍女の何人かにそういう薬師は、ボクの胸にいる焰を取り上げて横抱きに抱き上げると、すぐに用意ができた寝台に彼女を寝かせた。

「風邪薬を作りましょうね。すこし待つていてください」

侍女達も、それにつたがつて引き下がる。部屋には意識を失つてしまつた焰とボクと兄が残つた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8566y/>

わたしとボクのぬくもりの距離。

2011年12月1日18時50分発行